

メタボリック症候群とヘリコバクター・ピロリ菌感染に着目した 大腸腺腫・大腸癌の背景因子の探索的疫学研究

東京大学医学部付属病院消化器内科

山道 信毅

はじめに

近年、*Helicobacter pylori* (HP) 感染に伴う大腸ポリープ発生のリスク上昇の可能性が報告¹されているが、我が国における大規模疫学的検討は少ない。我々は、大規模人間ドックを受診した健常成人を対象に、HP感染と大腸ポリープの関連を検討した。2010年の亀田幕張クリニックドック受診者のうち全結腸検査を施行された3,476人を対象に、血清HP抗体検査、血清ペプシノゲンI／II値、一般血液検査、既往歴、様々な生活習慣などからなる17の背景因子と大腸ポリープとの関連を検討した。17因子を説明変数、大腸ポリープを目的変数として χ^2 乗検定及びロジスティック回帰による単変量解析を行い、明らかな交絡因子を除外後、標準化ロジスティック回帰分析による多変量解析を行った。

結 果

データ欠損者及びNSAID常用者を除外した解析対象3,156人（男性2,403人、女性753人、平均年齢 55.4 ± 9.1 歳）のうち、大腸ポリープは1,147人（36.3%）に認め、血清HP抗体陽性者は1,136人（36.0%）であった。単変量解析では、年齢、性別、BMI、HbA1c、TG（中性脂肪）値、Brinkman index、飲酒頻度、HP抗体定性、ペプシノゲンI／II比が有意であった（ $p < 0.05$ ）。HP抗体定性と交絡するペプシノゲンI／II比を除いた8因子について多変量解析を行ったところ、Brinkman index（標準化偏回帰係数SC 0.287、 p 値 < 0.0001 ）、男性（SC 0.266、 $p < 0.0001$ ）、高齢（SC 0.251、 $p < 0.0001$ ）、HP抗体陽性（SC 0.126、 $p = 0.0011$ ）、BMI（SC 0.125、 $p = 0.0029$ ）、飲酒頻度（SC 0.117、 $p = 0.0055$ ）、TG値（SC 0.099、 $p = 0.0135$ ）の順に、大腸ポリープと有意に正相関する因子であった。

考 察

大規模健常者コホートの横断解析から、大腸ポリープと正相関する因子として、喫煙、男性、高齢、HP抗体陽性、BMI高値、飲酒、高TG値が同定された。HP除菌が2013年に保険認可されたことを受け、今後HP除菌が大腸ポリープへ及ぼす影響についても検討が必要である。今回我々はマッチング比較による検討を行ったところ、除菌により大腸ポリープ発生が減少する可能性が示唆されたが決定的結果には至らなかった。今後、さらなる前向きの検討が必

要である。

要 約

我々はHP感染と大腸ポリープの関連につき大規模疫学的検討を行った。その結果、大腸ポリープと正相関する因子として、喫煙、男性、高齢、HP抗体陽性、BMI高値、飲酒、高TG値が同定された。今後HP除菌による大腸ポリープへの影響につきさらなる前向き検討が必要である。

文 献

- 1 Inoue, Mukoubayashi, et al、Elevated risk of colorectal adenoma with Helicobacter pylori-related chronic gastritis: a population-based case-control study、Int. J. Cancer: 129, 2704–2711、2011